研究主題

「自分事として道徳的価値を捉え、自己の生き方について考えを深める児童の育成
―教材の登場人物に自身を投影し、生活や体験を想起しながら考える体験的な学習を生かした指導の工夫―」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
小平市立小平第十二小学校　主任教諭　隅谷　佐知子

第１　研究のねらい

小学校学習指導要領（平成 29 年３月告示）の「第３章　特別の教科　道徳」には、「児童が自ら道徳性を養う中で，自らを振り返って成長を実感したり，これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること」とある。そして、自己の生き方についての考えを深めることに関して、「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編（平成 29 年７月）」（以下「道徳編」という。）には、「児童が道徳的価値の理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考えることを通して形成された道徳的価値観を基盤として，自己の生き方についての考えを深めていくことができるようにすることが大切である」と示されており、その重要性が認識できる。

令和４年度東京都小学校道徳教育研究会の調査における、第３学年から第６学年までの児童 14,415 人への「道徳科でよく考えているときはどのようなときか」の質問では、「登場人物の気持ちを考えているとき」や「教科書を読んでいるとき」と回答する児童の割合が５割程度であるのに対して、「ふだんの生活と比べて考えているとき」や「これまでの自分やこれからの自分について考えているとき」は３割弱という結果が出ており、展開の前半に比べて、後半の割合は低くなっている。以上の結果から、中学年以降の児童は、主に教材を基に道徳的価値についての理解を図る展開の前半が、主にこれまでの自分を振り返り、生き方について考える後半につながっていないことが推察される。その理由として、教材の登場人物の心情や言動を自分事として捉えることが不十分であったため、道徳的価値が表面的理解にとどまっていたのではないかと考えた。

道徳編には、「自己の生き方について考えを深める際,道徳的価値の理解を自分との関わりで深めたり、自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方などを確かに想起したりすることができるようにする」と示されている。

そこで、体験的な学習を生かした指導を通して、児童が教材の登場人物に自身を投影し、生活や体験を想起しながら、自分事として道徳的価値を捉えることで、展開の後半での自己の生き方について考えを深めることにつながると考え、本主題を設定した。

第２　研究仮説

体験的な学習を生かした指導の工夫によって、児童が教材の登場人物に自身を投影し、生活や体験を想起しながら考え、自分事として道徳的価値を捉えることができれば、自己の生き方について考えを深めることにつなげることができるだろう。

第３　研究の方法と内容

１　基礎研究

研究主題に関する基礎資料や情報の収集をした。道徳編には、児童が自分事として考えることにおいて、「指導の際には,（中略）本来実感を伴って理解すべき道徳的価値のよさや大切さを観念的に理解させたりする学習に終始することのないように配慮することが大切である」ことや「道徳的諸価値を理解したり,自分との関わりで多面的,多角的に考えたりするためには,（中略）道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れることが考えられる」ことが示されている。よって、自分事として考えるために、実感を伴って考えることができる体験的な学習が有効であると認識を深めた。

２　調査研究

(1) 調査の概要

令和５年７月に都内公立小学校の教員約 100 人及び、第４学年及び第５学年児童約 200 人を対象に、意識調査及び実態調査をＷｅｂアンケートにて実施した。

(2) 調査結果（児童対象調査）

質問「教科書のお話に出てくる登場人物の気持ちをよく考えている」では、92％の児童が肯定的に回答したが、質問「『自分が登場人物だったら』と登場人物になったつもりで考えている」では、肯定的に回答をした児童の割合は 75％にとどまった。

(3) 調査結果（教員対象調査）

質問「児童が自分事として考えることを意識して指導しているか」では、肯定的に回答した教員の割合は、93％だったが、質問「生活や体験を振り返りながら考えている児童は、クラスでどれくらいいるか」では、クラスの７割以上と回答した教員は 23％となった。

(4) 考察

児童対象調査の結果から、より登場人物の心情や言動を自分事として考えることができるよう「登場人物に自身を投影して考えるための指導」の工夫が必要だと考えた。また、教員の多くが、自分事として考える指導をしていても、児童が生活や体験を振り返ることについて十分でないと捉えていることから、「生活や体験を想起するための指導」の工夫が必要だと考えた。

(5) 研究の手だて

上述の「登場人物に自身を投影して考えるための指導」と「生活や体験を想起するための指導」の工夫として、体験的な学習の１つである役割演技に着目した。そして、役割演技の効果を十分に引き出せるよう以下の３点の手だてを考えた。

ア　教材提示前の工夫

教材と関連するＢＧＭを流したり、実物を提示したりする。また、教材と似た実際の場面を想像させ、「このような場合、どのような気持ちになりますか。」と問い、教材の内容と自身の体験とを結び付けられるようにする。

イ　発問の工夫

児童の発言やつぶやきなどの反応を受け、「登場人物の気持ちは分かりますか。」等と問い、教材の登場人物をより身近に感じられるようにする。

ウ　役割演技における工夫

全員が二人組になって演じた後、代表児童が皆の前で演じる。どちらの場合も、それぞれの立場に立って、演じられるよう役割交代をする。また、代表児童の台詞や動作、表情などを取り上げ、それらの理由や心情について考えを交流することで、道徳的価値の理解を深められるようにする。

３　検証授業

都内公立小学校第４学年と第５学年の各児童 30 人を対象に、令和５年９月 27 日から 11 月 20 日までの期間に実施した。その中から、第５学年の第３回目の授業について報告する。

(1) 検証授業の概要

ア　主題　　分かり合う心【Ｂ友情、信頼】

イ　教材名　「心のレシーブ」（東京書籍）

ウ　ねらい　互いに分かり合い、よりよい人間関係を築いていこうとする心情を育てる。

(2) 評価の観点

段階	本時のねらいを基にした「自己の生き方について考えを深める」評価の観点
本時のねらいを十分に達成した児童	友達の心情を十分に分かろうとしていなかったことを自覚し、これからの生活で頑張りたいことや気を付けたいことを考えた。あるいは、友達の心情を分かろうとしていたことを自覚し、さらに目指したいことを考えた。
本時のねらいをおおむね達成した児童	友達の心情を十分に分かろうとしていなかったことを自覚している。あるいは、友達の心情を分かろうとしていたことを自覚している。
本時のねらいを十分に達成していない児童	友達の心情を十分に分かろうとしていなかったことを振り返っていない。あるいは、友達の心情を分かろうとしたことを振り返っていない。

(3) 評価の観点に即した観察対象児の表現内容

本時のねらいを十分に達成した児童は 12 人、おおむね達成した児童は 15 人、十分に達成していない児童は３人だった。各段階の観察対象児童を１人ずつ抽出し、授業前から授業後までの変容を見取った。

段階	評価の観点に即した表現内容	児童
本時のねらいを十分に達成した児童	バレーの時にしっかり動いてくれない子がいたから、「ちゃんとやって。」と言ってしまいました。相手の気持ちを考えながら言うことは、とても大切だと分かりました。相手と話すときは、相手の気持ちを大切にして話したいです。	Ａ児
本時のねらいをおおむね達成した児童	私も人の気持ちを考えないで、強い言い方で言ってしまったときがあります。そのときを振り返って、なぜそうしてしまったのかと考えて、「ごめんね。」と言いたい気持ちになりました。	Ｂ児
本時のねらいを十分に達成していない児童	他の人ができて、自分ができないと、相手から責められる。	Ｃ児

３人の児童の変容から、Ｂ児の学習状況を取り上げ、報告する。

(4) Ｂ児の学習状況

役割演技において、代表児童として演じる際、Ｂ児は、皆の前で緊張したのか、言葉に詰まってしまうことがあった。指導者がＢ児に、「良夫さん（相手役）が言ったことを聞いてどのような気持ちになりましたか。」と尋ねて支援すると、「うれしい。」と答え、続いて、「良夫さんだって頑張っていたよ。」という言葉を相手役の児童に伝えた。展開の後半の振り返りでは、友達の心情を考えず、強い口調で言ってしまった経験を振り返り、「なぜそうしてしまったのかと考えて、『ごめんね。』と言いたい気持ちになりました。」とワークシートに綴っていた。検証授業後の面接で、Ｂ児は、「役割演技をして、友達に強く言ったことや言われたことを思い出した。」と答え、続いて「友達の気持ちを考えたい。」と語った。

(5) Ｂ児についての考察

「良夫さんだって頑張っていたよ。」という言葉は、登場人物の立場になって、相手の役を分かろうとする心情を表現していると捉えた。そして、ワークシートの「ごめんね」と言いたい気持ちになったという表現は、Ｂ児が、役割演技で登場人物に自身を投影したことで、友達を分かろうとすることの大切さに気付いたからではないかと考えた。また、Ｂ児が面接で語ったことから、Ｂ児は役割演技を通して、体験を想起し、友達を分かろうとすることの大切さに気付いたことで、これからの自分を考えることができたと考えた。

(6) 授業後の面接の結果

10 人の児童に行った授業後の面接では、「登場人物の気持ちになって、よく考えたと思う場面はどこか」という質問に対して、「役割演技をした場面」と答えた児童は 10 人中８人であった。そして、役割演技は、自分のことを考えるきっかけになったと話した児童は、10 人全員という結果となった。さらに、「役割演技をして、どのようなことを考えたか」という質問に対して、「友達の気持ちを考えて言葉を掛けよう」など、これからの自分についてのことを話した児童は、10 人中７人であった。

(7) 授業後の質問紙調査結果

授業後の質問紙調査では、「登場人物の気持ちになって考えていること」「教科書のお話と似たようなことを思い出すこと」「これからの生活や自分を考えること」など全ての項目で、クラスの９割以上の児童が肯定的に回答し、「そう思う」と回答する児童の数も増加した。

第４　研究の成果

１　成果

登場人物同様、友達の心情を分かろうとしなかったことを自覚しているワークシートの表現内容や面接で聞き取った児童の考えから、役割演技によって、児童は、登場人物の心情や言動を自分事として捉えられたと考える。さらにＢ児の学習状況の分析から、役割演技によって実感を伴って、道徳的価値を理解したことで、生活や体験を想起しながら、これからの自分について考えられたことが分かった。よって役割演技は、展開の前半で自分事として捉えた道徳的価値を、後半の自己の生き方について考えることにつなげる上で有効であると考える。

２　研究成果物

これらの成果を生かし、「役割演技の形態や方法」や「役割演技のポイント」など、役割演技を授業に取り入れる際、活用できるガイドブックを作成した。

第５　今後の課題

役割演技の効果が見られなかった児童に対しての指導の手だてを考えていくことや教員の悩みを基に、役割演技の効果をより一層高める指導方法を開発することを課題とし、道徳の授業の充実に向けて、今後も研究を続けていく必要がある。